



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



アパシー症候群を呈して長期留年を続けた事例についての一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): apathy syndorome, student apathy 作成者: 清水, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/682

アパシー症候群を呈して長期留年を 続けた事例についての一考察

清水 信 介

A Consideration on the Apathy Syndrome: Through the Cases of Some Students Made to Spend Many Years' Campus Lives by the Syndrome

Nobusuke Shimizu

Abstract

During the past two decades, the student apathy became the most important emotional problem of the college student.

In this paper, I will present five cases of the student apathy, in which cases the students had to spend their campus lives at least for seven years because of the apathy syndrome. Then I will discuss the characteristics of their psychodynamics and family dynamics and so on. They are all male students. Four of them had been in apathetic state for three to five years until they came to the therapist. In all the cases, the author conducted counseling for them for more than one year. In the early stage of counseling process, the Thematic Apperception Test was administered to them in order to assess their personality. A follow-up survey has been continued to trace their status of adjustment for four to six years after they left or graduated from their colleges.

I はじめに

近年注目されている青年期の適応問題の1つに特有の無気力症状を呈する病態がある。これは当初大学生にみられる新しいタイプの神経症と考えられていたが、その後この無気力病態（アパシー症候群）が大学生に限らず広く高校生年代から若年サラリーマンにまでわたっても生じることが分かってきた。

大学生におけるアパシー症候群はスチューデント・アパシーとか学生無気力症と呼ばれている。スチューデント・アパシーという名称は、ハーバード大学保健センターの精神科医 Walters (1961) の論述⁸⁾に由来している。彼はほとんど男子学生に限ってみられる特有の無気力病態を1つの疾患単位としてとらえ、その本質を男性性形成に関する解決しがたい葛藤のために足踏みしている青年が失敗、敗北の予想される場面でおこす心理的防衛であるとして論じている。彼の研究はアパシー症候群についての最初のまとまった論述である。本邦におけるアパシー症候群の研究としては、丸井文男 (1967, 1968)⁴⁾⁵⁾が留年学生に関する研究の中で意欲減退症候群による留年学生の増加に注目し、これを新しいタイプの大学生の神経症として報告したのが最初である。その後、各大学の保健管理センター、学生相談室などの精神科医や心理学者によってスチューデント・アパシーに関する症例報告や論考が提出されてきた。中でも、京都大学保健管理センターの精神科医であった笠原嘉はスチューデント・アパシーの中核型を準神経症 (paraneurosis) 段階のものとして位置づけて論考を重ねているが³⁾、アパシー症候群が大学生以外にも見出せることから、スチューデント・アパシーに代わる包括的な名称として「退却神経症」を提唱している。これは、笠原が Walters と同様に、アパシー症候群の最も重要な特徴が競争場面からの選択的退却にあると考えるからである。

大学生のアパシー症候群あるいはスチューデント・アパシーが問題とされるようになってから20年近くたった現在、臨床場面では従来典型的なスチューデント・アパシーとされてきた中核型事例が減ってきて、近縁群もしくは広義のアパシー事例が増えていることが指摘されている⁶⁾⁷⁾。また、アパシー概念に関して研究者間で微妙な差異があり混乱がみられるとの指摘もある⁷⁾¹⁰⁾。こうしたことから、最近スチューデント・アパシーの典型例を再定義し広義のアパシーをも含めて分類整理しようという試みがなされている⁶⁾。また、アパシー概念の統一をはかるために、従来主症状とされてきた選択的退却だけに着目せずこの病態の基本症状となるものを明らかにしようという研究も行われつつある⁷⁾¹⁰⁾。このほかに、治療方法論に関する研究も今後持ち越された検討課

題となっている。アパシー症候群の事例では、治療への動機づけが低い者が少なくなく、その治療には難しさが伴う。そのため、アパシー事例の治療報告はまだまだ数が限られており、治療論に的を絞った論考が極めて少ない。さらに、この病態の予後についても、長期予後は悪くないとされてはいるが³⁾、具体的に長期にわたって追跡し検討をした研究がほとんどないのが実情である。スチューデント・アパシーの研究においては、まだ検討されるべき問題が多く残されている。

本稿では、アパシー症候群を呈して7年以上にわたって大学生活を送らざるを得なかった5つの事例を取り上げる。各事例をTAT資料、治療過程での観察記録、卒業・退学後のフォローアップ結果などの面から検討し、アパシー学生の精神内界や家族力動の特徴などについて考察する。

II 研究方法

1. 対象事例

筆者がこれまでに関わりを持ち長期的に観察し得たスチューデント・アパシー5例である。すべて男子学生の事例である。5例とも、筆者が1年以上の間カウンセリングを行った。さらに、卒業・退学後の経過についてフォローアップを行っている。(表-1参照)

2. 資料収集の方法

本研究で用いる資料は以下の手続きによって得られた。

(1) TAT資料

全事例に対して、カウンセリング過程の初期に投影法性格検査TATを実施した。図版はハーバード版で、13枚(1, 2, 3BM, 4, 5, 6BM, 7BM, 8BM, 10, 13MF, 14, 15, 18BM)を使用した。

(2) カウンセリング過程における本人の陳述および筆者の観察

(3) 父母面接からの情報

事例Eにおいては、彼の卒業時に父母と一度面接しただけであるが、その他の事例では少なくとも2回以上の父母面接を行っている。

表－1 事例の概要

事例	学 校 名	年 齢	無気力化の始まり	保健管理センターを訪れた時期	カウンセリング関係がもたれた期間
		初接 回時 面 ／ 現 在			
A	H文 大学系	25歳 ／ 32歳	1年目の6月頃	6年目の6月	1年5カ月間 (6年目8月～7年目12月)
B	H理 大学系	24歳 ／ 31歳	1年目の秋頃	(5年目の7月) 6年目の6月	1年1カ月間 (6年目6月～7年目6月)
C	H理 大学系	24歳 ／ 30歳	1年目の4月下旬	6年目の5月	1年2カ月間 (6年目5月～7年目7月)
D	M大 工業学	22歳 ／ 30歳	1年目の秋頃	4年目の2月	2年10カ月間 (4年目2月～7年目11月)
E	H理 大学系	23歳 ／ 33歳	4年目の6月頃	5年目の10月	1年5カ月間 (5年目11月～6年目3月)

(4) フォローアップ調査

どの事例に関しても、卒業あるいは退学から少なくとも4年間にわたって本人、親との接触を維持しその後の生活状況について把握した。

Ⅲ 事例の呈示

以下では、各事例毎に家族像、生育歴、大学入学から来談までの経過、カウンセリング経過とその後の適応状態、面接過程で観察された主な特徴・問題、TAT資料などを示す。なお、TAT資料は事例Aに関してのみ主要図版の反応と全体的解釈を記すが、他の事例においては紙幅の関係から本人の特徴を顕著に示すいくつかの反応と解釈の要約を掲げることにする。

1. 事例A H大学文系男子学生 初回面接時25歳（現在32歳）

〔家族像〕 父親50歳，母親48歳，本人，妹17歳の4人家族。父親は自動車学校の指導員。彼は自分が家庭の事情で十分な教育を受けることができなかつ

たので、子供には学歴のない苦勞を味わわせたくないという気持が強い。息子には早くから大きな期待をかけており、Aが大学を出たら地元の市役所に勤めさせ、家を新築して同居することが父親の念願であった。子供に対しては過干渉、支配的であり、子供にしがみつ়く感じがある。Aの留年が生じてからはますます干渉を強めている。母親は女性的な柔らかさに欠ける人である。父親のあり方とニュアンスを異にするが、子供に対してはやはり過保護、過干渉な傾向がある。妹は高校3年生。内気でおとなしい性格である。妹への父母のかかわり方も非常に保護的、束縛的である。

〔生育歴〕 Aは道北のP市近郊の農家の長男として生まれた。父母は彼が幼い頃から教育熱心であった。彼は「親の言うことをよく聞く良い子」で、第一次反抗期もなかった。幼時から父親の顔色を窺う傾向が強かった。長い間ひとりっ子の状態で育ったAは、妹が生まれる直前まで文字通り乳離れができなかった。母親に甘えたい気持が起こると乳房を吸う習慣が小学校1年生位まであった。2年生頃からは、父親に通知箋を見せる時が彼にとって一番緊張する場面となった。成績が悪いと、父親は「もう少し勉強しないと上の学校へ上がれないぞ!」と厳しく叱った。Aの学業成績自体は良く、6年生の時は卒業生総代をやっている。

中学時代は常に成績優秀であった。中学1年の時に父親が自動車学校に勤務するようになり、兼業農家となったが、農繁期でも父母は勉強を優先させAに手伝わせなかった。中学を卒業すると、その地域から唯一人P市の名門校H高校に通うことになった。排球部に入ったが、一学期末の成績順位が入学時に比べて大きく下がったため父親が退部を指示する。Aはそれに対して反論できずに退部したが、成績は上がらなかった。彼は中学、高校時代親に逆らうことが全くなかった。

H大学を受験するが失敗。一浪後、昭和×年4月H大文系に入学した。

〔大学入学から来談までの経過〕 入学当時彼は法学部へ進む心算でいた。この年6月頃までは授業に普通に出席していたが、その後やる気が起こらなくなっていった。前期試験が不首尾に終り、後期は頑張ろうと思って臨んだがすぐ

に息切れしてしまい、後期試験は受けなかった。結局、留年となる。2年目の新学期が始まると、これまでの分を挽回しようと考えて履修科目を多くしてスタートしたが、5月半ばから授業に出なくなる。以後は全く出席しなかった。3年目（3度目の1年次）には、教務課で法学部移行についてのアドバイスを受け、非常に多くの科目を履修するようにした。一発逆転を狙った。しかし、5月末頃になると気が抜けて授業にはほんの一部しか出なくなった。それまで社交ダンスのクラブに入ってやっていたが、帰省の折父親にダンスをやめないと大学に戻さないと迫られてしぶしぶやめる。彼は留年した本当の理由を親に言えず、ダンスに集中していたため留年したように話していたのであった。

4年目には、ここで頑張らないと法学部へ行けないと思い履修科目を最大限にした。しかし、またもや6月に入る頃から意欲が湧かなくなり授業に出なくなった。それでも、学部移行に必要な単位は何とか揃えることができた。結局、初めの志望とは異なって文学部のB学科へ移行することになる。

5年目は、B学科3年次に在籍し、4月には張切っていたが、5月から学校へ出なくなりその後は1日も出ないで過ごした。その年度の終り近くになり、彼は「今の自分ではこれ以上大学にいても駄目なので実社会に出て働いて自分のことを考えたい」と思った。切羽詰まった思いで帰省した彼は自分の気持を思い切って両親に打ち明ける。彼の必死の訴えは両親に大きな衝撃を与えた。それでも母親は彼の気持に理解を示したが、父親がひどく混乱し、挙句は「もしそうするのなら俺を殺してからしろ」と刃物を持ち出す有り様であった。父母は息子の精神状態を訝り、Aを精神科に受診させた。しかし、医師は精神疾患を否定した。受診後も彼は休学して働くことを主張したが、結局父母に押し戻されてもう一度大学でやってみるといふことに落ち着いた。

6年目は下宿からアパートに移り心機一転を期してスタートしたが、6月の終り頃から授業を休むことが多くなる。そして、7月上旬に自ら保健管理センターの精神科医の下を訪れる。

〔カウンセリング経過とその後の適応状態〕 初診の際、彼は「新学期の始めにはちゃんとやるつもりでいるのに、どうして5、6月になると意欲が湧か

なくなるのか自分でも分からない」と語っている。当時、彼は昼夜逆転した生活をしてきた。8月初旬から、筆者（非常勤カウンセラー）がカウンセリングを担当することになった。最初の3カ月は順調な経過を辿っているかに見えた。昼間中心の生活に戻り、学校に出る日も少しずつ増えていった。しかし、極度の完全癖が禍いしてレポート提出や定期試験にほとんど失敗してしまう。要求水準が高過ぎるためにレポート作成に取りかかれず延ばしているうちに期限を過ぎてしまう。また、試験の準備をしていながら不首尾を予想して結局試験を受けることをおろしてしまうのである。単位取得がうまくいかないで、彼は父親からの叱責を恐れるあまり後先を考えずに自分で成績票を偽造して親に渡し事態を一層難しくする。それ以外にも、某宗教団体の勧誘を断れずに入信してしまうなどの問題を引き起こし、事後それらを苦にして抑うつ状態となる。医師からの投薬も受けつつ行ったカウンセリングでは、それらの事態の収斂策を考えることに追われることが多かった。しかし、その過程で、彼は勉学への無気力が父親の思惑通りに動かないという形での受動的抵抗の意味をも持っていることに気づく。7年目の5月に到ってやっと筆者と父母とが関わりを持つことについてAが承諾したので、それ以上事態を複雑にしないためにAと両親同席の話合いを持った。その際、彼は父母に干渉しないで自由にさせて欲しいと訴える。これを契機に父母の干渉、介入が一時的、表面的には緩和される。新しい局面が訪れるかに見えたが、そこで却って彼の自立性の乏しさが顕在化し再び抑うつ状態となる。その後親子関係の面で迂余曲折があるが、Aに対する父母の支配的態度は変わらず、学業からの退却も改善されないまま7年目が終わった。この間に筆者が非常勤カウンセラーの職を辞すことになり、7年目後半からは彼の相談治療を精神科医に引き継いだ。8年目に入る春から彼は1年間休学。9年目に復学し最後のチャンスに挑むが、やはり以前と同じ状態を繰り返す。その年の9月末をもって退学した。退学後、彼は親元に帰らないで身体を使う仕事をしたいと両親に訴え、親もそれを認める。一時は自分の所在を親に明かさないうでラーメン屋の店員などとして働いていたが、3年後親元に呼び戻される。現在P市の某結婚式場で臨時の仕事をしているが、その仕事を長く続

ける心算はないという。

〔面接過程で観察された主な特徴、問題〕 本事例では、笠原³⁾がアパシーの精神病理学的特徴として挙げている性格における強迫的傾向、優勝劣敗への過敏さと本業部分からの退却が顕著に認められる。Aは学業から退却しているが、サークル活動、家庭教師や塾講師などの面では熱心であった。また、アイデンティティの不確かさ、親離れと自立のできなさなどの問題も色濃く認められる。初期の状態像はスチューデント・アパシーの典型例と考えられるが、停滞を繰り返し親からの介入、圧迫が強まるうちにうつ状態との境界型に近づいたものといえる。

Aの場合、深いつながりではないが一応2、3の仲間との交友関係があり、彼自身は対人関係での問題をさほど意識していない。面接場面では礼儀正しい態度を示す。自己不確実な傾向が強くカウンセラーに依存的であった。対異性関係では、「嫁探し」と称してやや唐突で強迫的な仕方と同じサークルの女性にアプローチすることが2、3度あったが、いずれも不首尾に終わっている。彼は大学2年目頃から自分が将来結婚した時に性的に機能しないのではないかという不安を強く抱くようになり、それを確かめようとして強迫的に masturbation を繰り返したり娼婦を相手に試みたりしたが射精したことがないという。

〔TAT 資料〕

(1) TAT プロトコル

〔図版1〕(概要) バイオリンを習っているのだけれども、あまり練習していかなくて叱られちゃった。それでしょんぼりしている。本当は、昨日、一昨日位は一所懸命稽古しておかないと先生に怒られるのだけど、遊んじゃった。“昨日はそれでもちょっとやったのになあ。でも怒られちゃった。僕が悪いのかなあ”という感じ。この先は、“まあ、いいや”という感じで一旦遊びに出て、友達とワイワイやって気分が晴れたら戻って来て、割とみっちり2時間位練習するのではないのでしょうか。

〔図版2〕(概要) 真中にいるのが息子で農場をやっている。馬を使いながら畑を耕している。右端にいて木に寄りかかっているのがその母親。割と自分勝手なところがあって、息子が自分の言うことを聞かないと、ひどく不機嫌になる。本を持っている女の人は息子の女友達で、お互いに好意を持っている関係なのだけれども、母親

としては気に入っていない。まだ若いけれども父親を失くして一家の主として農場を経営している息子とこの女性とは、彼が町に出た時にでも知り合って、割と馬が合うなどお互いを感じて口をきくようになりつき合いが始まった。で、今日ちょっと訪ねてみたが、母親はあまり良い顔していない。この先は、人格的にはこの若い女性の方がいくらか寛容であり忍耐強くて、ここへ妻として入って来て、いろいろ衝突がありながらも、最後には母親ともうまくやっていけるようになるだろう。

【図版3】(概要) 泣いている。眠っているようには見えない。服装から見て女性かな、ハイティーンの女の子かもしれない。何で怒られたのだろう？友達とか同輩との感情のゆきちがいとか喧嘩で泣いているというふうには見えない。自分より目上の人から自分の気持が分って貰えなくて叱られて、悔しくて泣いているという感じがする。で、30分位泣き続けて、ごろんと寝ちゃうかな。寝ちゃって目が覚めて、女の人のことだから案外ケロッとしてしまうんじゃないか。

【図版4】(概要) 夫婦ではない。あまり若くはないようだが、恋人同士で、どっちも同じ程度に好意をもっている。で、ちょっとした諍があつて、男の口から“何だ、それ位のことも！俺の気持が分からないか！”位の台詞が出てブイと帰ってしまいそうになっているところを、女性は理屈抜きで内容抜きで、とにかく機嫌を損じたことを一番びっくりして引き止めようとしている。この後は、男の方もそれが作戦で“よし、分かったな”という感じで女性の側に謝らせて、元に戻っていくだろう。

【図版6】(概要) 男性は沈痛な表情だが、この老婦人の方は割ときょとんとしたような普通の表情だから、何だろう？うーん、男性がこの老婦人の娘に会いに来た。しかし、この母親に“今いません。娘は会いたくないと言っています。帰って下さい”と言われて、男性は身体はがっしりしているが気が弱い方で困った表情をしている。立ち往生してしまっている。この後は、この感じからすると、やはり老婦人の方が強くて追い返されちゃうだろうと思う。

【図版7】(概要) 親子ではない、他人で。この老紳士の方が目上で社会的立場も上。若い方はいわゆる切れ者で新進気鋭で、将来の業績も含めた上でならば自分の方が上だという自信がある。しかし、現在は立場が老紳士の方が上であるし、自分は後輩で意見を聞かねばならないという立場で、硬い表情でとにかく低姿勢だけは崩さないようにして聞くだけは聞こうとしている。老人の方はそこまで見通して、自分の意見を言いながらその新進気鋭の後輩の気配、表情を見ようとしている。結局、新進気鋭の方は切れ者であるけど今はまだ円熟味というものに欠けるので、やはり2人で何かという時は老紳士の方が“まあ、こうしなさい”と強い口調ではないながらも、老紳士の思惑の方へ事が進んでいく。

〔図版13〕（概要） この立っている男の人は夕べはこの部屋に泊まってしまったけれど、これから勤めがあるから眠い目をこすりながら起きて服装を整えて出かけようとしている。女性の方はそんなことに気づきもせず、また気づいても気にもせず眠たいから眠っているというふうに見える。前の晩は、男の人の方が割と主導権を握っていたが、何かこういうちょっとした雰囲気を見ると、やっぱり女性が男性の上に立って操縦していると。この男性は出かける時にフッとそれを感じて、無意識のうちにやり切れなさを感じている。男性は“まあ、そんなこと言っておられない”と言って元気を奮い起こして出かけて行く。女性は昼近くまで眠っているだろう。

〔図版14〕（概要） 地下室の出口。男の人が地下室で何か探し物をしていて。今外へ出ようとしたところで立ち止まって、外の景色を改めて眺めて“明るいな、今日は。そう言えば良い天気なんだな”と思っている。この人は、それほど重要なものではないが過去の思い出につながるような物を探しに来たが、なかった。今出る時になって外の景色を改めて眺めた時に、その地下倉庫で捜そうとしていたことに関する思い出が蘇って来てふと立ち止まっている。5分位こんな格好のまま見ていて、頭を振って“いや、もういい。忘れよう”という感じで出て行ってしまふ。

〔図版18〕 後から男2人につかまれていて、今この場所を離れたいだけと離してくれない。この人に対して非難、中傷みたいなものが浴びせられて孤立無援で居たたまれなくて帰りたくなる。そこを引き止められる。男2人につかまえられたから、振り切って逃げることもできないので一旦踏み止まるだろう。そして思い切って自分なりの弁解を試みるのじゃないかと思う。

(2) TAT 所見

Aの中核の問題は家族的ウロボロスから離脱できず自立していけないことである。父母との関係、家族のしがらみに捕えられ、それに抗するだけの力もなく身動きのとれぬまま呻吟しているというのが彼のいる状況なのであろう。図版18の《今この場所を離れたいんだけど離してくれない》というのはそうした心的状況の端的な表現とも受けとれよう。

母親像は支配的な性格が強く息子の自立的な動きを阻むような特徴を示している。Aが母親あるいは母性的なものと対決して現実に自立性を獲得するのはまだまだ先のことのように思われる。というのは、図版2の物語で息子と女性の関係について楽観的な結末が示されているが事態の解決は女性の側にのみ求められており息子の気持は何も語られていないし、図版6においては男性が立ち往生し母親に追い返されてしまうからである。

父親像はどの図版の物語においても直接的には登場せず、図版2では父親の死が語

られている。父子関係を反映することが多いと言われている図版7では、《親子ではない、他人で》とわざわざ断っている。これらは彼の父子関係の特徴や父親に対する敵意、否定的感情が潜在していることを示唆する。父親との関係は尊敬や信頼に根ざしたものではない。実際彼の父親は非常に支配的で、図版7の物語に示されているように親の〈立場〉によって子供をコントロールし自分の思惑の方向に従わせようとする傾向が強い。父親に対してAは内心は反発、敵意、軽蔑などを感じているが、現実行動では父親の機嫌を損ねることを恐れ、表面上服従することによって事態を処理しようとする人が多いようである（図版4，7）。息子に強く干渉ししがみつきの主体性を呑み込んでしまうような父親のあり方は母性的傾向の強いものである。彼の家庭には真の父親性は不在であり、心理的にはいわば母親が2人いるかのような母性の強い家庭状況なのである。図版2の物語の家庭状況はまさにこの点をも表わしていると思われる。この物語の〈母親〉は、母親像を示すと同時に、子供に一体性を強く要求しそこから離脱を好まない家族的ウロボロスをも象徴しているとも解せよう。

Aは人の顔色に敏感で（6）、他者、殊に目上の人や権威像に対して恐れや圧迫感を抱き易く、自己をはっきり主張することができない。他者に対しては服従的となるか依存的になることが多い。学業その他の課業への取り組みにおいて彼を動かしている主要な力は親や教師等からの叱責や承認など外からのものであって、彼を真に動かす内的な力、自律性は十分育っていないようである。彼は誇大な理想的自己像を抱いており、現実吟味が甘く空想レベルで楽観的な見通しを持ち易いが、現実的にもご自分を自分の意志によってやり抜くという姿勢に乏しい（1，7）。現実に取り組み努力するよりも空想の世界に入り込んで、そこで理想的な状態、過去の自己の好ましい姿や思い出などを追い求め慰めを得ようとすることも多いのであろう。そういう時外の日常世界（現実）は自分とはずっと隔たって存在するよう感じられ、眩しく近づき難いものと感じられるのかもしれない（14）。

彼は性格的に女性的な面が強く男性性の形成が不十分である（3，4，6）。これと関連して、彼は対女性関係において積極的な役割をとれない。女性に深く接近することや性的に関わることにしても葛藤や抵抗があるようだ（6，13）。また、彼は男らしさを肉体的、性的次元からのみとらえがちで、その面で自己の男性性を確認しようとする傾向がある。彼が将来結婚した時に性的に機能しなかったら困るという不安を抱き、射精できるかどうかを強迫的に確かめようとするのもこのことと関わっているであろう。

2. 事例B H大学理系男子学生 初回面接時24歳（現在31歳）

〔家族像〕 家族構成は父親53歳，母親46歳，本人，妹20歳の4人。父親は郵便局勤務。温厚，素朴な感じの人で，これまで子供に対しては放任的であったが，Bのつまづきが長びき，妻のうつ病の経過が思わしくないこともあって，筆者が関わり始めた頃にはBのことに積極的に取り組み始めている。母親も郵便局勤務。神経質，心配性な面があり，自己本位で情緒の不安定な人である。4年前にうつ状態で1年程治療を受けその後も時々調子を崩している。これまで父親が自分の考えや態度をはっきり示さなかったこともあって，Bは母親の意向を両親の意向と受けとる傾向が強い。妹は会社勤務。明るくこだわらない性格で積極的な女性。

〔生育歴〕 青森県の田舎で出生。両親共働きのため，彼は昼間他家に預けられていた。彼が小さい頃母親は電話交換手で夜勤があったので，Bと母親の接触は少なかった。彼は親に口答えしない子で，第一次反抗期もなかった。母親はBをヒステリックに叱りがちであったが，父親が彼を叱ることはあまりなかったという。小学校時代，彼はあまり勉強もせず暗くなるまでよく遊んだ。交友関係で困ることも特になかった。中学になると，サッカー部に入ったが，帰宅すると疲れて何もしないので母親が勉強のことで煩く言うようになった。母方の親戚には教育関係者が多く，通知票はオール5でなければ駄目だという考え方が強く，B自身も次第にそういう観念を抱くようになっていったという。

中学2年時，彼は心因性の身体的変調を経験している。当時校内暴力的事件があり，彼は自分も標的になるのではないかと強く怯えていた。さらに，小学時代から仲良くしていた子がある施設に送られるという出来事があり，Bは教師に対して不信感を抱くようになった。その頃から頭痛が始まり，視力障害が生じる。自宅にいる時には異常がないのだが，学校では人の顔がよく見えず判別できないような状態が1週間続いた。

高校進学に際して，彼は自宅からも近くサッカーの強いH高校へ進みたいと考え，父親もそれを諒解していた。ところが，教師はレベルの高いQ高校への受験を強力に勧め，母親もこれに賛成する。母親はサッカーをしたいという彼

の希望を我儘だとして取り合わず、彼も自分の考えを言っても聞いて貰えないと思って主張しなかった。Q高校入学と共に親元から離れて下宿することになったが、自分の気持を親に無視されたという思いが残り続けた。級友が皆優秀に見え、勉強について行けないのではないかと不安を感じた。失敗することを極度に恐れ、完全癡的な傾向が強まっていった。周りの仲間が大きく見えて緊張していたという。この頃から皮膚炎が出現する。3年生になる頃、彼は地元大学への進学か就職することを考えていた。ところが、教師が地元の国立大学よりもレベルの高いH大学を勧め母親も乗り気で、結局Bは自分の考えを主張できぬままH大学を受験した。

〔大学入学から来談までの経過〕 H大学に合格したが、彼は納得できない気持であった。親が荷造りなどの支度を進めてしまうので家を追い出されるような心境で大学に来たが、自分の目の前にあるものを受け容れられなかった。周りの仲間が皆一本筋が通っており光っているように見えた。仲間と個人的な話をするのは少なかった。入学後間もなく神経性下痢が始まり3カ月程続いたが、授業には普通に出ていた。夏休みに父母に不調を訴えたが取り合ってもらえなかった。秋口に入って脱力感が生じ、人と会うのが億劫になり、仲間との交流も少なくなっていった。皮膚炎にも悩まされるようになったが、それでも単位は何とか取っていた。2年目の初めに、前年度唯一つ落としていた物理学の再試験に関して教官の不手際があったが、彼は、自分の言い分を認められずに不公平を蒙ることになった。そのことでひどく腹が立ち落ち込んで、そこから気力が失くなっていった。親元へ電話して脱力感、食思不振などのため勉強ができないと訴えたが、耳を傾けて貰えなかった。後期が始まり授業は何とかこなしていたが、中学の時と同じような視覚障害が出現した。結局、前期に単位が取れなかったことが響いて留年となる。3年目の秋に学部移行に必要な単位が揃い、工学部P学科へ移行する。その年の12月までは普通に出席していたが、以後気力を失い学校へ出なくなる。4年目は、4月のガイダンスに出席しただけで、その後は学校に行かなかった。稀にアルバイトをすることもあったが、ほとんど下宿に籠っていた。5年目も最初から全く学校に出ていなかった

が、7月になり保健管理センターの精神科医の下を訪れる。

〔カウンセリング経過とその後の適応状態〕 5年目7月に精神科医受診の際に、筆者も一度Bと会ったが、当時担当しているケースが多く継続的に面接することが不可能であった。そこで、その夏保健管理センター主催で行われたエンカウンター・グループ合宿への参加を勧めた。合宿後彼は人と話ができるような気持ちが湧いて、1年半ぶりに後期の授業に出るようになる。ところが、思うように授業を理解できずまた本を読んでも頭に入らないということから、完全癖の強い彼は焦り始め翌年2月頃から再び無気力状態に陥る。

6年目の6月に父親とBから面接希望があり、幸い筆者にも時間的余裕ができたので継続面接を開始した。カウンセリング過程の初期に、彼は勉強しようとしても思うように集中できないこと、専攻への不適合感、進路が自分の意志と関係なく親によって決められたことへの不満などを語り続けた。また、無気力、脱力感、吐気などを訴え、皮膚炎にも悩んでいた。カウンセリングの進展と共に10月末から皮膚炎は消退し、本を読んでも集中できるようになっていった。彼は父母が大学卒業を強く望んでいると思い込んでいたが、父親は息子の意志を尊重するから大学卒業にこだわらずに社会へ一人立ちしていく道を探らずに探すようにとBをサポートするようになる。6年目末で在籍期間満了となるが、カウンセリングはその後2カ月程続けられた。その間に、Bは初めて父親から激しく叱られる経験をする。自分の思い込みにとらわれて現実を見ようとしない息子に対して真赤になって怒る父親を見るのは彼にとって初めてのことであり、嬉しくも感じられたという。これは彼の内的父親像の変化をもたらす重要な経験となった。結局、彼は父親に支えられて、母親の反対を乗り越え、東京に出て親戚の家で働きながら夜間専門学校へ通う道を選んだ。大学退学から6年後の現在、彼は印刷関係の仕事で順調に働いている。

〔面接過程で観察された主な特徴、問題〕 本事例は自我異和的の症状や葛藤を有し自ら悩む神経症的なケースであり、いわゆる典型例ではない。性格面では強迫的傾向が著しく、またDSM-Ⅲ¹⁾による回避型性格の特徴と一致する面も認められる。Bは非常に完全癖が強く些細なミスなどにこだわるため課題を

成し遂げるにも不要な時間と労力を消費することになる。また、優劣に敏感であり、他者からの批判に戦々恐々としている。

学業への気力を失い退却しているが、彼は自宅で自動車模型の設計製作などを熱心に行っており、生活全般にわたって無気力なのではない。

Bは親、殊に母親からの心理的離脱ができておらずこれをめぐる葛藤に苦しんでいた。高校進学、大学進学いずれの場合も、彼は自宅に近い学校を選択しようとしており、根底には家庭、親元から離れ難い気持があることが推測される。彼が抱く父母のイメージは実際以上に干渉的、支配的な性質を帯びている。そうした父母像を投影して自分の方で一方的に事態を悲観的に予測し、苦しみ悩みながらも親に対して自己主張したりぶつかったりしない。また、母親に心配をかけないようにという思いも強く、大学をやめたいのだけれどもそうできないでいる面もあった。

対人不安が強いため、自ら人との深い接触を求めることはなく親しい友人は一人もできなかった。また、異性との交際経験は全くなかった。

〔TAT 資料〕

(1) TAT プロトコル

〔図版1〕(概要) バイオリンがどうしてもうまく弾けなくて、誰かにそれを叱られたりして悩んでいる姿のように見える。それで、このまましばらく沈んだ感じですっと思うように思う。大体、子供が手で頭押さえるというのはよほど沈まないとなことだから。

〔図版4〕(概要) 男の人と女の人は恋人同士でいたが、何か喧嘩でもして男の人が出て行こうとするのを女の人が止めているような映画の1シーンのように見える。男の人はそのまま出て行くのを止めそうに見える。

〔図版6〕(概要) これはお母さんと子供の男の人で、子供の方が何か問題を起こしてお母さんの方は呆然と外の方を見ている。それに対して子供の方は何とか言って謝ろうかと思うのだけれどもできないというような感じに見える。男の人はうつ向き加減で女の人は窓から外を視点が定まらないような感じでボーとしているように見える。その後どうなるかということとは分からない。

〔図版7〕(概要) 陰険そうな男が2人で何か悪事を企んで相談しているようなところに見える。左側のひとが右側の人に何か相談をもちかけているようで、右側の

人は苦虫を噛みつぶしたような“まずいな”というような表情に見える。この後どうなるかは想像できない。

〔図版13〕(概要) 裸の女の人が寝ていてシーツを巻きつけているように見える。男の人はちゃんと服をつけているが、女の人はぐったりしたような感じなので、これから出かけるところだと思う。眠い目をこすりながらそろそろ出かけなきゃいけないというシーンだと思う。

(2) TAT 所見

父母との感情交流は現実には薄いようであるが、Bの内界では母親像が大きな位置を占めている。彼は母親の期待、要求を感じ易く、その枠から脱け出すことができにくい。仮りに母親の意向に沿わない行動を示すならば、そのことが母親に心配、混乱をもたらすのではないかとといった不安、恐れが彼を拘束するようである。おそらく、母親はそうしたことがあると感情的になり現実的な対応ができにくくなるのであろう。そうなると、彼の方も罪悪感を抱きおろおろした状態となる。結局、彼は年齢相応の自立的な行動をとることができず、不満や無力感を抱くことになる。母親は彼にとって暖かさ、優しさを与えたり支えてくれたりする存在ではないようである(6)。

父親イメージは母親のそれに比べるとはるかに影が薄い。いずれの図版においても具体的な父親像は登場していない。おそらく、彼は自分を方向づけてくれたりリードしてくれるような頼もしい父親像を体験することが少なかったのであろう(7)。父親への同一化が十分になされなかった彼は能動的、男性的な行動傾向に乏しい。

Bは他者からの叱責、批判に対する耐性が弱く衝撃を受け易い。挫折や葛藤事態に出会うと容易に沈み込んでしまう。無力感、抑うつ感情で一杯になり、周囲の状況や自分のあり方に目が向かなくなり、現実吟味も悪くなる。沈み込んでいるだけで現実的な問題解決の動きが生じにくい(1)。

厳しい超自我の持ち主である彼は自己を抑制する傾向が強く、殊に他者に対して攻撃性を直接表現することはほとんどないようである。また、自分の気持、考えよりも他者の意向の方に正当性があるように感じて自己主張をできない面もあるのだろう。彼は対人関係において葛藤、対立などが生じかけると、その関係から退きがちである。彼が自分を護るには〈逃げる〉、〈ひき籠る〉といった形をとるしかないであろう。図版6の物語の《視点が定まらないような感じでポーとしている》という表現は、困難な現実が目に入らなくなることを連想させるが、彼の身体症状(視覚障害)との関連で考えると興味深い。

異性との関係は空想レベルでは生じるとしても、現実的で身近かなものとしては考えられないようである(4)。性的関心は抑圧されており、仮に異性との接触の機会

があったとしても、性的な要素は捨象されたものになると思われる。母親への固着の強い彼にとって女性との成熟した関係が生じるのはまだ先のことであろう(13)。

3. 事例C H大学理系男子学生 初回面接時24歳(現在30歳)

〔家族像〕 父親58歳，母親56歳，兄27歳と本人との4人家族。父親は国鉄を停年退職後民間病院に勤務。温和で口数が少なく感情を抑える傾向が強い。家庭でも怒ったり自己主張をしたりすることがない。家族間のごたごたから逃避しがちで家庭内では影の薄い存在である。母親は子供ばい面を有する多弁な人である。子供に対して口煩く干渉的・侵入的な関わり方をする。兄は国立大学卒業後食品工場に勤務。兄は幼時から母親に溺愛されて育ち，我儘で自己主張の強い人であり，気に入らないことがあると感情をむき出しにして怒鳴るといふ。父親は長男が感情的になると本や新聞を読んだりして無視を装うことが多い。Cは現在でも兄が暴力を振るうことを極度に恐れている。

〔生育歴〕 幼稚園の頃までは遊び友達も多く結構活発であったが，自家中毒を起こして幼稚園を休むことがよくあった。母親は子供の振舞いや遊びについてあれこれ干渉するほうであった。Cは小さい頃から正義感が強く理屈に合わないことが嫌いであった。それ故，小学校低学年の頃は級友とよく喧嘩をし殴り合いとなって，母親が学校に呼ばれたこともある。3年生の頃は学業成績がクラスで1，2番であったが，自分が仲間から好かれていないように感じていた。自分が好かれないのは怒鳴ったり，殴ったりするからだと思うようになった。他方，家庭では母親が常に兄の肩を持ちたてていた。兄には吃音があったため，母親は気を遣い始終「兄さんを敬いなさい」と言ってCの頭を押さえていたという。彼は母，兄との三者関係において自分の言い分を認められず，悲しく悔しい経験を重ねていたが，父親がそれに関与して調整することはなかった。小学校4，5年頃から級友との間で自己主張をしようとしたり感情的になったりすると，涙が出て来るようになる。彼はその現象を自分の弱点として恐れるあまり怒りなどの感情を強く抑えるようになり，そうした感情が動いてもどう処理していいのか分からなくなっていったという。

中学時代は，クラスでは話をする仲間がいたが，学校外でつき合う相手はい

なかった。高校時代には友達も少なく、つき合っても表面的な関係しか持たなかった。

〔大学入学から来談までの経過〕 昭和×年4月にH大学理系に現役で入学。4月中は頑張って授業に出ていたが、下旬に風邪で1週間休みその後あまり出なくなる。朝の授業に遅れて欠席すると、自分が休んだことをクラスの仲間が知っていると思いそれが気になり、結局その日は出られないのであった。クラスの仲間との交流はほとんどなかった。後期に入るとますます欠席が増えたが、2年生への進級に必要な単位はなんとか取ることができた。翌年度も初めの1カ月間位は比較的まともに出席していたが、6月以後は学校に足が向かなくなる。単位不足のためにその秋に学部移行をすることができなかったが、翌年学部移行するために必要な単位を満たそうと思い語学の授業には出ていた。

3年目の前期はまずまずの出席状況で、秋にはM学科に移行。しかし、それは第一志望とは異なる不本意なものであった。そのため、M学科移行後は意欲的になれず、履修単位数も出席日数も最低線ぎりぎりのところでやっていこうと考えたという。4年目の前期も出席日数の最低線を割らない程度に授業に出る。冬休み前までは何とか出席していたが、その後ぱったりと出なくなる。元来絵を描くのが大の苦手な彼は製図が不得意科目となり、そこでつまづく。

5年目の新学期を迎えたが、必要単位数が揃わないため卒業研究に着手できなかった。その年度の前期はある程度授業にも出ていたが、前期定期試験には合格する自信のある1、2科目だけしか受けず他は回避してしまう。後期に入ると、学校に全く出なくなる。家の外にも出ず昼夜逆転した生活となり、家族と一緒に過ごすことも少なくなる。結局その年度末になっても単位がかなり不足し、次年度も卒業研究に着手できないことが確定する。6年目の初めに両親が学科主任から呼ばれ、その際保健管理センター受診を勧められる。

〔カウンセリング経過とその後の適応状態〕 Cが来談したのは6年目の5月下旬であった。精神科医による初診の後、筆者がカウンセリングを担当することになる。初回面接では、彼が自発的に語ることはほとんどなかった。長身で髪を伸ばし放題にした彼は、挨拶もなくのっそりと入室しきょんとしたよ

うな面持ちで着席して黙りこくっている。初期の面接で彼はポツリポツリとつぎのようなことを語る。できれば卒業したいが、現状をどうしたらよいか分からない。仮に大学をやめるとしても、それから先どうするかが分からない。休学にも踏み切れない。そういった問題について考えると頭が混乱してきて、そのうちに投げ出してしまうという。当時も昼夜逆転の生活をしていたが、面接のある日だけは前夜から寝ないで来談するなどして面接をあまり休まず続ける。面接を重ねるうちに少しずつ自発的に語ることが増え、また家族との会話も増えていった。しかし、授業には全く出なかった。学科主任が他の教官に働きかけて彼のために再試験やレポート提出の機会をつくってくれる。彼もそれに感謝するのだが、その時になると皆すっぱかしてしまう。窮余の一策で休学を勧めるが、彼は後期にはやれそうだからといって耳を貸さない。しかし、後期になっても大学に出れず在籍期間の残りを徒につぶしていくだけであった。母親との間に葛藤を抱えながら、母親に対する感情を語ることに不安、罪悪感があり、自己の内面に触れたがらない。父親と筆者が会うことについては反対しないが、母親との面接については秘密が漏れるからといって拒み続けた。カウンセリングはなかなか進展せず、7年目に入っても事態は変わらなかった。7年目の夏に至り、(事例Aと同じ理由で)筆者とのカウンセリング関係は終りとなった。それ以後、彼は他に相談関係を持つことをせず経過し、結局7年目の終りに在籍年限が切れて退学となった。その後一時3カ月程郵便集配作業のアルバイトをすることもあったが、再び家の中に引き籠る生活に陥る。退学から5年後の現在もほぼ同様の状態にある。

〔面接過程で観察された主な特徴、問題〕 回避型性格に該当する性格特徴が顕著である。例えば、他者からの拒絶、非難、軽蔑に出会う可能性に対して過敏であり、他者に裏切られたり相手が陰悪な態度になったりすることを恐れて人との関係の中に深く入りたがらない。対人関係以外でも失敗や悪い結果が生じることを恐れて回避的行動を示すことが多い。1年目の最初に休み始めた際にも回避的性格傾向が禍いしたものと思われる。これと併存して、強迫的性格傾向も認められる。

彼は自己不確実な傾向が強く、生活のいろいろな局面において自分で主体的に決断したり選択したりすることが著しくできにくい状態にあった。

前述の如く、彼は人との深い接触を好まないのが大学での交友関係はなかった。他者と親しい関係になるほど「近づきたいが、近づくのが怖い」という両価的な態度になる。治療関係においても、自分の感情を表現するとカウンセラーが怒ったり暴力的になったりするのではないかと、あるいは涙が出てきてしまうのではないかとという恐れを長い間持ち続けていた。異性との交流は中学時代から全くなく、面接過程で女性への関心が語られることもなかった。

本事例はアパシーの典型例に近いとみてよいと思われる。

〔TAT 資料〕

(1) TAT プロトコル

〔図版 1〕(概要) 親がバイオリンを無理矢理やれと言って、本人は嫌だと言っている。行きたくなくて練習所へ行こうかどうしようか迷っている。そして、結局行かない。

〔図版 2〕(概要) 一番左の女性がこの真中で畑仕事をしている男性を好きなのだが、右の樹のところに監視しているような女がいる。男性の継母みたい人で労働を半強制的にやらせている。それで、左の女性は男性とデートしたいのだからできない。この先は、この継母みたいな人が死んだら結ばれるというか。うーん、もうすぐ死ぬ(笑い)。

〔図版 3〕(概要) 何かうつ伏せになって泣いているみたい。裁縫やっていた袂で間違っただけのあたりを切っちゃって泣いている。ちょうど袂が見えるので、そういうことにした。

〔図版 7〕(概要) 何かひそひそ声で相談をし合っている。何か悪企みでも企んでいて、これから計画を練って実行に移そうかなという感じ。

〔図版 13〕(概要) 若い女性が睡眠薬でも飲んで死んだのか。死ぬ前に電話で男性に怨みつらみか何か言っただけで死んだ。男性は「これは大変だ」と思ってここに駆けつけてみたけれど、時すでに遅しという訳で見ている。電話かけて救急車呼んで泣きながら待っているところ。

〔図版 14〕(概要) 朝起きたところで、窓を明けて朝日か何かを見ている。この部屋は窓しかなくて中は暗い。この暗い部屋に閉じ込められているのか。これ高い塔の上にあるような部屋の感じで、逃げ出そうと思っても窓が高いから窓を開けても逃

げられない。捕まっている。部屋には何もなくて、「いつになったら出られるのかな」と朝日を見ている。まあ、一生ここで暮らすでしょう。

(2) TAT 所見

図版14の物語はCの現在の心的状況を端的に表している。現実生活から離れ自分の世界に引き籠っている。それは無気力、やや抑うつ的な気分に移された世界である。そうした現状から脱する見通しもそれへの主体的な動きも窺えない。問題を明るみに出すのでもなく、したがって直面することもなく現状に止まり続ける(2, 14)。問題解決への道はまだまだ遠いように思われる。

Cの場合問題の中心は母親との関係にある。彼は干渉し呪縛し呑み込んでしまうような否定的母親像に強く捕えられており、自立的な動きを示せずにいる(2)。母親に対する潜在的な敵意、憎悪が窺えるが、それを露にすることへの恐れ、抵抗も強いようだ。母親との間で対立やめごとが生じると、彼は困惑したまま事態を処理できないことが多いのであろう。現状は母親と対決し克服していくことについて無力感を抱いており母の世界から出立できない状態にある。

母親像が強力で支配的なものであるのとは対照的に父親像は希薄である。父親のイメージはどの図版においても直接的な形では登場していない。父子関係を反映することが多いと言われる図版7の物語では2人の男性の上下、長幼の関係やどちらがリーダーシップをとっているかなども明確に語られていない。彼にとって父親は自分を指導したりリードしてくれたりする存在ではなく、彼を母親の世界から連れ出してくれる役割を果たしていない。図版7の《ひそひそ声で悪企み》とは、支配的な母親の意向とは異なる行動であろうか。父親と自分とが接近することが悪として感じられているのかもしれない。彼は男性性を形成していく上でのモデルとしての頼もしい父親を経験することができなかったのであろう。男性性、攻撃性を陶冶していない彼は外界、殊に男性的な世界に対して恐れや不安感を抱き易い。攻撃性の表出は強く抑制され他者に直接向けられることはなく、むしろ、自分に向けられる可能性が高い。他者に対して怒りを表現したり自己主張したりすることは極めて少なく、自責的になったり自分を傷つけたりするような形で消極的に訴えることが多いのであろう(3, 13)。それゆえ、外界からの圧力、攻撃に対して拒否したり自分を護ったりする力も弱い。

上記のことから、彼は他者との間で対立関係が生じることを恐れ、情緒的に深い接触を避けて表面的な関わりに終始しがちである。また、人との愛情(依存)関係について頼れないもの、変わり易く当てにできないものという気持を抱いているようである。現在のところ性的関心は抑圧され未発達な状態に止まっており、現実的な女性との関係は生じにくいものと思われる。(13)

4. 事例D M工業大学男子学生 初回面接時22歳（現在30歳）

〔家族像〕 父親61歳，母親53歳，長姉26歳，次姉24歳，本人の5人家族。父親は某民間企業を停年退職後警備保障会社に勤務。父親はおとなしい性格で家庭ではあまり物を言わない。子供のことに關しては放任的で口を出さない。しかし，怒るとヒステリックに興奮するところがあり，夫婦喧嘩の際妻に暴力をふるうことがある。Dは幼時よりそうした父親を恐れておりいつも父親の顔色を窺ってきた。母親は専業主婦。末子のDに対しては小さい時から過保護に手をかけ育ててきた。現在の関わり方も極めて過保護であるが，彼女にはその自覚はない。長姉は独身。社交的な性格で喫茶店を経営している。次姉は公務員。おとなしく控え目な印象の人である。

〔生育歴〕 Dは末子で長男ということで母親に大事に育てられた。いつも母親と一緒にないと不安になるほうで，保育園時代も母親から離れて登園することをひどく嫌がった。保育園では仲間に馴染まず独りで遊んでいることが多かった。第一次反抗期はなかった。

小学校時代の彼は家庭外では自分の中に閉じ籠もりがちであった。人前に出るとすぐ赤面したが，自分が緊張していることを他人に知られるのを恐れた。また，人と喧嘩することは恐ろしくてできなかった。他の子達が喧嘩しているのを見るのも怖かった。それゆえ，いじめられても事を荒立てないように抵抗しなかったという。

中学校時代も学業成績は良かった。しかし，自分が他の仲間達のように明るく話せないで，自分は異質な人間なのではないかと思ひ悩んでいた。高校に入ってから人が怖く，人前で何かをすとなるとひどく緊張した。学校では仲間とろくに口もきけない状態であった。

〔大学入学から来談までの経過〕 昭和N年4月M工大A学科に現役で入学。入学後しばらくの間は緊張していたが，1年目の中頃になると下宿で友達ができて少しは話せるようになり安堵した。ところが，その頃から全く意欲が湧かなくなった。高校までは学校を休みたくても世間体を意識してそうした気持を抑えて登校していたが，大学では自己規制が弱まって欠席が増えていったとい

う。結局1年目のクラスでは親しい仲間ではできなかった。2年目になると、さらに授業に出なくなった。出席をとらない授業には全く出なかったが、グループで行う実験の時は仲間迷惑をかけては悪いと思えるだけ出席していた。

3年目に入ると、授業への出席が一層少なくなった。学校へ行かなくなると、教官や仲間を裏切ったような気がして、そのことで行きづらくなった。4年目は全く学校に出ず、ほとんどアパートの自室で過ごす生活であった。昼夜逆転した生活となりいつまでも布団の中にいることが多くなった。周りの目に対してひどく怯えていてひっそり隠者のように暮らしていた。4年目末、翌年度も卒業研究に着手できないことを知った母親が驚いて教務課を訪れ、そこで保健管理センターを紹介される。

〔カウンセリング経過とその後の適応状態〕 Dが母親、次姉と共に来談したのは4年目の終りの2月上旬であった。初回面接で彼はつぎのように語る。自分には人に対する恐怖症があり、それであまりアパートから出ない。それが単位の取れなかったことにも関係している。大学を続けていくとしても困難があると思うが、そうかといって別の道に進むことにも不安がある。それで、どちらにも積極的に踏み出せない。どうしていいかわからないと。

以後週1回のペースで継続的に面接を行うことになったが、面接場面ではニヤニヤと曖昧な笑いを浮かべて自分の感情や考えを露にしない態度が特徴的であった。5年目に入ると、5月中旬まで曲がりなりにも授業に出席していたが、講義に出ている周りの人間が気になり圧迫感を感じると訴え、やがて出なくなる。面接も休みがちになるが、筆者がアパートを訪問したりしてつないでいた。10月上旬から治療的進展（内的な父親との和解）があり、生活のパターンが普通に帰ってきちんと講義に出るようになる。しかし、その後深層に秘められていた母親に対する攻撃性が表面化しかかり、それへの抵抗が生じて面接に対して消極的となる時期が数カ月続く。6年目に入り、学期始めには履修申告をするかどうかためらっていたが、授業にもかなり出るようになり、面接も1年間きちんと続ける。その過程で、彼は筆者に議論を挑んできたり反発したりするようにもなり、自己主張的な面が育ってくる。7年目を迎える頃には、卒

業しようという気持がそれ以前よりも強まって新学期の初めに自ら学科主任の下を訪れ取得単位数や卒業の見通しについて相談している。それ以外の面でも現実に目が向くようになる。面接にも休まず通ったが、11月中旬本人の希望により終結とした。そして、8年目に卒業研究を成し遂げてM社に就職。現在、社会人4年目を迎え元気に活躍している。

〔面接過程で観察された主な特徴、問題〕 本事例はスチューデント・アパシーの典型例とみてよいであろう。元来の性格として強迫的完全主義的傾向が強い。例えば、一度授業を休むと、つぎ出席するには教科書を勉強して授業を完全に分かるようにしてからでないと駄目だと考え、空想的万能感に基づいた楽観的な見通しを立てる。しかし、現実には一向に目標を果たせず結局休んでしまうことになる。

また、彼は自己不確実な状態にあり、生活の種々の局面において決断、選択のできなさが顕著に認められた。彼の言表によると、重大な場面になると頭の中が空白になって自分の気持が分からなくなる。自分で判断しようとする、間違いを犯すのではないかと心配になって決められず常に曖昧にしまうという。こうした現実適応での困難は幼児期からあって、それゆえに空想世界へ傾きがちであった。彼は「昔から空想的理想を掲げて現実というものを軽視していたと思う。今も、どこまでが現実でどこまでが空想なのか区別がはっきりしない」と語っている。

母親離れ、自立ができていないDは大人社会へ出て行くことに強い不安を抱いていた。カウンセリング開始からしばらくの間、彼は社会へ出ることへの不安を口に「なぜ人は働いて生きていかなければならないのか」と言い続けた。

対人恐ろしい傾向も認められた。人と話をしたり人前で何かをしたりする時にひどく緊張ししどろもどろになる。あるいは相手から罵倒されるのじゃないかという不安のために相手の意向に合わせようとのみしてしまう。周りの学生が自分よりも大きく見え圧倒される感じで恐ろしいと訴える。そこには、男性性形成の弱さやアイデンティティの不確かさが関係していると考えられる。

〔TAT 資料〕

アパシー症候群を呈して長期留年を続けた事例についての一考察

(1) TAT プロトコル

〔図版1〕(概要) これはドイツ人で、この少年には厳格な父がいて、勉強しろだのバイオリンを弾けだの言われている。少年はそういうものが好きでないけれどもやっている。まあ、明日からも相変わらずやっていくのかな……。

〔図版2〕(概要) この絵は結構昔のものじゃないか。左の女の人は服装から見て20世紀初めの先生という感じがする。この土地は結構暖かい所で中世のエーゲ海と見たが、この人が何か異質というか。まあ、学校の先生ということで北部の方から転勤してきたという感じ。こういうのんびり畑を耕しているという状況で、先生の方は新しい学校へ来てから1週間位ということでまだよく分からないという感じだが、そのうちこの風土にも慣れてやっていくのじゃないか。

〔図版4〕(概要) 昔の映画みたいな感じ。こっちの女の人は現地人で、女の人が迫っているけど男の方は何か逃げようとしている。(pause 61秒) うーん、男の方は外人部隊で、こちらは慰安婦ということにしておく。男は鉄砲の音が聞こえたので出て行こうとしている。それを女の人が引き止めようとしている。男は出て行くが、そのうちに銃撃戦が止んでまた戻ってくる。

〔図版7〕(概要) 親と子かなと思ったんだけど、この人は教科書に出てくる物理の先生に似ているから物理学の先生が実験していると見た。親と子でもいいんだけど、親と子としては近づき過ぎていて異様な感じがして。でも、実験しているところにしては変だなあ、親子というのが妥当な線かもしれないが、よく分からない。まあ、いろんな親子関係があるのだろうけど、うちの場合は物理的にこんなに近寄ったことはないような気がする。

〔図版13〕(概要) これ男と女なんだけど、こちらは何か裸で寝ているような気がする。男の方は目を押えて泣いているのかな？何で泣いているのか。変だなあ(笑)(pause 64秒)男が何で泣いているのか意味不明だけど。(pause 82秒)これは性的な関係があったんでしょうか？(pause 87秒)まあ、簡単にいうと性的な関係が終ってこうポーズしたというか(笑)。何かこう変な関係で、何ていうか。まあ、離婚問題で何か争って泣いたというようなのか。そうじゃない。よく分からないけど、何か悲しくて泣いた。これ乳房出しているけど、乳房出して寝る人いるのかな？不可解だな。まあ、男の方がいろいろ男女間のことがあって泣いているということにすると、失恋でもしたのかもしれない。

(2) TAT 所見

Dの家族関係の特徴は母親との結びつきの強さと父親との心理的距離の遠さにある。彼は密着した母・息子の世界にどっぷりとつかっており、そのことへの自覚に乏しい

(2)。空想レベルでは母親的なものから離れる必要性を思うことも多少はあるようだが、ぬくぬくとした母の懐から出立していない。他面、意識水準から遠いところには母親に対する敵意、攻撃性が潜在することも窺われる。まだ意識化されていないそうした感情が急激に意識にのぼるとすると、彼に強い不安、混乱をもたらすことも予想される。

父親に対しては近寄りたがりたい感じを抱いており親しさを持って交流することがない(1, 7)。また、資料として掲げてないが、図版6の物語では父親の死が語られており心の奥底に父に対する敵意、憎しみを秘めていることも推測される。彼にとって父親は同一視の対象というよりも怖くて遠い存在であり男性性を育んでいく上でのモデルとはならなかったのであろう。また、母・息子一体の世界から彼を連れ出すような役割も果たし得なかったと思われる。

彼の深層にはかなり未分化な攻撃衝動が潜在しているものと推測されるが、それらはほとんど意識にのぼらず自我に統合されていない。Dが対人場面で見せるニヤニヤした曖昧な態度は潜在する攻撃性に対する反動形成的防衛という側面をも含んでいるのであろう。

対人関係では、他者と深い接触を持つことに対して不安が強く、自分の意志や気持をはっきりと表わさない。また、男性的、攻撃的な人物に対しては特に不安、恐れを抱き易い。異性への関心は薄く、現実に関係に入りこむことにはためらいがあると思われる。少なくとも対女性関係では積極的な役割をとれず、性的な関わりについても戸惑いを生じ易いようである(4, 13)。

5. 事例 E H 大学理系男子学生 初回面接時23歳 (現在33歳)

〔家族像〕 父親52歳、母親47歳と本人の3人家族。父親はC市市役所の管理職。おとなしく生真面目な性格で職場では信頼されているが、家庭では影の薄い存在。父親自身若い頃完全癖が強く苦勞したという。母親は専業主婦。内気で社交性に欠け家庭内に閉じ籠りがちである。静かな波立つことのない家庭で、Eは帰省しても親と話すことがなくつまらないと述べている。

〔生育歴〕 Eは関東地方C県で生まれ育つ。一人息子の彼に対する母親の期待は大きかったらしく、幼稚園の頃から小学校高学年までいつも母親が付き添ってオルガン、習字、絵などの習い事に通っていた。しかし、父母と一緒に遊んだり深い情緒的交流を持ったりすることは少なかった。殊に、Eと父親との接触は乏しかった。

中学校時代までは交友関係の面で特に困ることはなかった。しかし、高校入学後は、中学時代からの友達以外に親しい友ができなかった。どの学年でも勉強以外のことでクラス仲間と交流することができず、クラス内で孤立する傾向にあった。特に高校2年の夏に中学からの唯一の親友が転校したことによってショックを受け、以後友人関係がつまらなくなり孤立感を強めていったという。なお、彼は中学、高校時代を通して家庭でもおとなしく親に反抗した経験がない。北海道にあるH大学に憧れて受験したが失敗し、一浪して再度挑戦。昭和M年4月H大学理系に入学。

〔大学入学から来談までの経過〕 1年目は建築工学科に進むという目標を持って真面目に授業に出席した。授業への出席だけに明け暮れる生活で交友関係はなかった。単位取得状況は良好であったが、物理学だけは理解できず不合格となる。そのため、翌年秋に志望学科へ移行することができなくなった。

2年目を迎えると、どうしても建築工学科に進みたいと思ったので2年目前期終了時点での取得単位数を意図的に不足させて留年し翌年に備えることにした。3年目の前期には抜かりなく単位を取り、その秋念願の学科に移行した。学科に移ったら友達ができるのではないかと期待していたが、他の仲間達は教養部のクラス毎にまとまる傾向があり、彼はそこへ入って行くことができなかった。4年目には3年次に進級したが、仲間づき合いが極端に乏しいことが学業にも影響し始める。他の学生達は分からない所を互いに教え合ったりしてやっていたが、彼にはそれができずレポート提出が遅れがちになっていった。最大の困難は設計演習であった。自己決定、判断のできにくい彼にとって自主的に課題を仕上げねばならない設計演習は苦手なものとなった。しかも、案を練る段階で「他の人よりも秀れたものでなければ」といった観念に強くとらわれるために具体的な作業が一步も進まないのである。その年はほとんどの課題が未提出に終わった。留年となり、5年目も再度の3年次となる。その年度は前年合格しなかった科目を履修し直して講義に出た。同時に学科教官の計らいで研究室に出てそこで設計演習を完成させる手筈となった。しかし、前期に何とか一課題だけ完成させたものの後期に入ると演習課題が進まなくなり、心細さ

のあまり10月中旬に自ら保健管理センターの精神科医の下を訪れる。

〔カウンセリング経過とその後の適応状態〕 医師の診断は「軽い離人症様症状と対人恐怖傾向を伴うスチューデント・アパシー」であった。11月中旬から筆者とのカウンセリング関係が始まる。初回面接で彼はニヤニヤと曖昧な笑いを浮かべながらつぎのようなことを訥々と語る。今の状態は気力がないことと怠慢とが背中合わせになっているような感じだ。内から起こってくるものが枯れてしまった感じである。建築のことには興味が失くなって、パイプオルガンに興味がある。人と接しても何を話していいか分からない、雑談ができない。第2回面接から彼は話題に苦勞し沈黙気味となる。生活状況について問うと、部屋でいつも同じことをしているのであまり覚えていないと言う。そして、自分の方から特に話すことがないので先生の方から質問して欲しいと語る。といて、面接に対して拒否的というのではない。具体的な話題や方向づけがないと自分の気持、考えを述べることができにくいのである。それでも、彼は何とか面接を続けていた。

翌年2月に学科主任から呼び出されて定期試験を受けるように言われるが、結局すべて欠席してしまう。設計演習も全く手つかずに終わる。そして、6年目も3年次に籍を置くことになった。心配した学科主任の計らいで研究室に毎日出て設計演習に取り組むことになる。6月下旬、Eは「学校へ出るようになったし自分で考えてやっていきたい」と強く希望する。筆者も室蘭へ転勤し面接日の設定に自由がなくなったため、カウンセリングを中断することになる。しかし、その後講義には出席するが演習が一向に進まないため研究室に行けなくなり、10月下旬にカウンセリング再開。後期の定期試験は受けるが設計演習は依然停滞したまま7年目を迎えることになる。学科主任はこの危機を乗り切るために他の人の模倣をしてもよいから設計課題を提出するようにと指示する。しかし、彼は他の人と同じものは嫌だという気持と設計演習本来の建前にこだわりそれに踏み切れない。そうした彼にあきれかつ困り果てた学科主任は、卒業するための最後の手段としてその年度休学してその間に演習課題を完成させるように示唆する。結局、7年目は休学し、8年目の4月に復学。8年目には

教官と大学院生が手取り足取りして彼の卒論作成を援助し、その年の12月下旬に卒業となる。翌年4月から1年間故郷のC市役所に臨時職員として勤務していたが、その後は職を得ず家庭でブラブラする生活に入る。1級建築師の資格取得を目ざして2度受験するが失敗。卒業から7年後の現在、1級建築師試験に3度目の挑戦を試みる心算であるというのが、家でブラブラの状態が続けている。

〔面接過程で観察された主な特徴、問題〕 Eは強迫的性格傾向、優劣への過敏さと本業部分からの退却、アイデンティティ葛藤と進路喪失、無感動・無快樂状態（アンヘドニア）など笠原によるアパシーの精神病理学的特徴をすべて備えている。

カウンセリング開始当時、彼は学業場面から退却し自宅で音楽を聞いたり新聞を読んだりして過ごすことがほとんどであったが、稀にパイプオルガンを見に出かけたりしていた。在学中にアルバイト等をすることは全くなかった。

アイデンティティの不確かな彼は、「目的を持って専門の勉強を一所懸命している仲間、逆に要領よく遊んでいたたりプレイボーイ的にやっている仲間に対しては劣等感、圧迫感を感じる。また、自分が呑みこまれてしまうような不安を感じて近づけない」と語っている。

彼は人との関わりにおいて極めて受動的、消極的であり、自分の方から他者に働きかけて関係をつくり出して行くことができなかった。一度関係ができた人との間でも接触が途切れてしまうと、その関係の継続を望んでいるにも拘らず自分の方からアプローチせずに相手からの働きかけを待っているということになり易い。カウンセラーや学科教官との関係においても同様で、働きかけがあると拒否することなく応じるが、何かで接触が途切れるとそのままの状態経過してしまうのであった。

異性との関係は全くなく、面接において女性のことが話題になることも皆無であった。

〔TAT資料〕

(1) TATプロトコル

〔図版1〕(概要) 何か悩んでいるような感じ。この子供にとってこのバイオリンは大き過ぎるというか大人のバイオリンだと思うので、弾きたいけれども手にするには大き過ぎるしまだ弾けないのでどうしようかなと思っているのじゃないか。子供用ののが親に買って貰えないとしたら、これで一生懸命やってみようというしかないという感じ。

〔図版2〕(概要) 左の女性がちょっと不釣合な感じ受けるので分からないな。どうしようかな?……こちらの2人が夫婦として。この夫婦が畑を持って生活しているところにこの女子学生がふらりとやって来て、一晩泊めてもらうかも分からないし、翌日また別れてつぎの旅に出るとか。

〔図版6〕(概要) この若い男性がつき合っている女性の家に訪ねて来た。非常な大邸宅に住んでいて、この女性はメイドで男性に対応している。男性が女性に会いたいのので取り次いでくれと言うが、メイドはそれを拒絶する。いろいろ押し問答をしているが、そういうことは外聞もあってできないと。メイドはプイと横向いてしまい、男性は「それならこの場はしょうがない」というような感じである。

〔図版7〕(概要) 2人の男性は上司と部下という間柄。例えば大学の教授と助教という感じ。何かの会合の場で、ともかく意見をいわなきやならないので打合わせをしている。発表するのは部下の方だが、上司の教授の方は同じ研究をしているからそういう思惑があって、2人の間で意見の喰い違いがあったら困るので、ヒソヒソ話をして助教の発表のときに備えている。

〔図版13〕(概要) この2人はきょうだいで、こっちが弟でこちらは姉さん。2人は一緒に暮らしていて、姉さんが一人にいる時に悪漢か何かに来て姉さんが犯される。姉さんが放心状態であるところに弟が帰ってきてこういう姿を見て非常に落胆している、悲しみにくれている。

〔図版15〕(概要) 少女の頃に何らかの作用か何かによって死んでしまった。それで長い間墓地の中に埋められて50年位も経ってから、またふとしたことで蘇ってしまう。そして、墓地から出て来てこれからは当て所もなく彷徨ってしまう、そんな感じ。

(2) TAT 所見

図版1の物語は課業に対する彼の強迫的な関わり方を端的に示している。《大き過ぎるバイオリン》は要求水準の高さを象徴しているのであろう。要求水準が高過ぎるために、課題に向かう際にそれを成し遂げるには今の自分では十分ではないという観念にとらわれてなかなか取りかかれぬ。やりたいのだけど動き出せずに悩むことになる。かといって、大き過ぎるバイオリンを取り換える(高過ぎる要求水準を修正す

る) ことにはならず、《これで一生懸命やるしかない》と強迫的に繰り返すだけである。彼は、また、問題や気がかりなことがあってもそれに直面せずに回避してしまいがちである。自己決断、選択を求められるような場面において主体的にそれを成すことができないまま迷い止まっているような状態に陥り易い。あるいは、世間体や体面を気にするあまり物事をあきらめてしまったり自由に振舞うことができなかつたりすることも多い。

抑制的で硬い自我のあり方が窺われるが、それ故に彼の内的世界(情動、本能的部分)は圧殺されるのであろう。彼は内面の感情に深く触れ実感的に感じとったり表現したりできにくい。殊に怒りや攻撃感情は強く抑圧され外へ表現されることがほとんどない。彼の自己不確実傾向、無感動・無快樂状態は内的世界、本質的部分の圧殺に由来するものと考えられる。図版15の物語の《死んでいた少女》は彼のアニメ像、soul image ではなかろうか。

Eは父母どちらとの間においても情緒的つながりが薄い。母子関係、父子関係についてのイメージを生じさせ易い図版6、7において《メイド》、《上司と部下》が登場するのもそのためであろう。母親像は特に過干渉とか過保護といったイメージではない。母親についての感じ方は、愛情、依存の対象というよりも身の回りの世話をしてくれるメイド的な存在という感じが強いのかもしれない。父子関係のイメージも対外的な結束、共通の利害などで結びついているようなニュアンスが強く、親密な感情交流を持つ関係ではない。彼にとって父親は保護的、主導的な役割をとるような存在ではなかったのであろう。資料として掲げてないが図版5では《夫の仕事からの帰宅が遅いのが続いてあきらめて寝てしまう主婦》がイメージされている。おそらく、彼の家庭では心理的に父親不在、夫不在の傾向が強かったのであろう。

そうした家族関係の中で育った彼は男としての同一性が不明確であり、男性的役割を十分に果たし得ないところがあるのかもしれない(1)。

対人関係では、閉鎖的で共感性に乏しく他者と表面的な交流しかもてないようである。異性との関係はまだ現実的なものとして登場しない状態にある。特に、性的な事柄を身近かなものとして受けとめがたい。性的関心は抑圧されており、むしろ性的なことに関わりを持つことを好ましくないこととして感じている可能性がある(13)。

以上、笠原や土川の所説に照らして典型例と判断される4例と自我異和的な事例(神経症的な事例)1例について紹介した。)

IV 考 察

1. アパシーの始まりと来談までの経過

各事例の大学入学以前の適応状態をみると、事例Aは高校時代まで特に挫折することなく経過している。事例B、Dではそれぞれ中学時代あるいは幼児期から仲間に対する不安や気後れ、自己の性格についての悩み、心因性身体症状などを経験しており、また事例C、Eも特に高校時代から仲間集団において孤立的となり表面的な対人関係しかもてなかったが、いずれも大きくつまづくことなく経過している。

大学でのアパシーの始まりは、A、B、C、Dの4例では1年目にみられる。事例Eだけ4年目（3年次）になって挫折しているが、これも意図的の留年がなければ3年目でつまづいた可能性がある。このように無気力化の始まりが大学生活の前半期に集中しているが、これはスチューデント・アパシー一般にみられる傾向である。筆者がこれまでに経験した他のアパシー事例でもほとんどが2年目の終り頃までには発症しているし、他の研究者も同様の傾向を報告している⁷⁾⁸⁾。発症から相談機関を訪れるまでの経過年数は、事例Eでは1年4カ月であるが他の事例では3年半から5年という長いものになっている。スチューデント・アパシーは一般に自ら相談機関へ援助を求めてくることが少ない。その理由については笠原が詳しく考察している³⁾のでここでは触れない。我々の事例のうち3例は一応形としては自発来談となっているが、厳密には純粋な自発来談は事例Eだけである。事例Aの場合、5年にわたって停滞を繰り返し学業からの離脱を考えようとした時に親に精神科を受診させられ、その後も親からの介入が強まり追いつめられて来談したのが実情である。事例Bでは、入学から5年目に入り漸く積極的にかかわり始めた父親から受診への促しがありBにも自分の状態を理解してもらうための支援を得たいとの動機が生じて来談している。また、Eの自発来談にしても、その背後に間接的に受診を促す力が作用していたともいえる。彼の場合、学部移行後につまづいたため学科教官によって学習指導としての働きかけがある程度継続的になされており、それに応

えて動けないことが本人を心細くさせ来談せしめた面もある。

以上のことはアパシー学生への援助策に関して大切な問題を示唆している。前述のように、アパシーは大学生活の前半期に始まることが多いが、通常この時期には一般教育が中心となり学生と教員との直接的、個人的接触が少ないのが実情である。しかも、アパシー学生は交友関係が乏しいためにつまづきが生じていても仲間関係による支援を得られない。こうしたことから、学生が無気力化し学業から退却していても長い間気づかれないで放置されている場合も少なくない。このような学生の早期発見を容易にするような修学指導体制をいかに工夫するか。アパシー学生の相談治療には多大の時間を要し、しかも在籍年限との関係が問題となることが多いだけにこの問題は重要である。

2. 無気力化のプロセスとそこに関与する要因

つぎに、各事例における無気力化のプロセスについて検討する。事例Aの場合、アパシーの引き金となるような挫折体験などは認められない。入学後2カ月程で生じた本人にも理由の分からない学業への無気力にはいくつかの心理機制が複合的に関与していると考えられる。その1つは、彼自身が面接過程で語っているように学業で停滞し父親の思惑通りに進まないことによって抵抗するという側面である。Aは幼少時から父親の機嫌を損ねることを恐れ父親の意向に逆らわないようにしてやってきたが、内面では父親に対し強い反発、怒りなどを感じていた。進学、就職地のことなどに我がことのように身を入れ干渉してくる父親に嫌悪や軽蔑の念を抱いていたという。Waltersは息子の教育で代償的な喜びを得ようとした父親に対して学業につまづきその願望を充足しないことで父親を罰する手段としてアパシー化した事例を報告している。Aの場合もこれと類似の心理機制が働いていると思われる。学歴に価値を置き息子の将来に自己の夢を託している父親にとって学業での停滞は極めて手痛い打撃となり得る。彼が父親の叱責を恐れ年度初めに努力を誓いながら同じような停滞を何度も繰り返した不可解な現象も受動的抵抗という無意識的動機の内容を考えると首肯できよう。

彼の学業に対する無気力、選択的退却の背景で働いているもう1つの要因は、

勝ち負けに過敏であるために予期される失敗、敗北などの事態を避けたいという恐怖から競争場面をおりてしまうという心理的防衛である。これは Walters や笠原がスチューデント・アパシーの本質的問題として指摘していることである。彼の場合、このように競争事態から退却する傾向は小・中学校時代の野球やバスケの部活動の面においても認められた。

事例Aのアパシーの背景には少なくともこのような心理機軸の複合したものが主軸として作用しているものと考えられる。そして、その根底には親からの自立や男性性形成などの面でのつまづきという自我発達上の問題がある。

事例Bでは、自分の志望と異なる大学への受験・入学に伴う不本意感、親元から離れて新しい環境へ入ることへの不安などを契機として1年目からつまづき始めている。親に自分の気持ちを無視されたという不満、怒りを抱いているが、それは直接表現されず彼の中でくすぶり続ける。他方、男性としての自信や自立性に乏しい彼は周りの仲間に対して圧倒される感じや劣等感を抱き、不安・緊張を強めていく。そして、強迫的身構えが一層強まり勉学上での心身の負担を増す結果にもなったと思われる。2年目初めに再試験にまつわる挫折体験があり一層無気力となる。再試験をめぐる教官とのやりとりにおいて彼は教官の不手際に対し強く抗議したり自己主張したりできず押し切られて不利益を蒙る。この局面でも、他者との対立から退き戦おうとしない男性性の弱さが顕著に認められる。外に向かって表現されない怒り、攻撃性は内向して抑うつ的となり気力を失う。困難な現実を拒否するかのように視覚障害が生じる。大学をやめて親元へ帰りたいのだが、親はそれを許さないと思い込み、親に自分の気持ちを正面から訴えない。彼は抜け道のない葛藤の中で苦悩し、しゃがみ込む感じで無気力化し退却していったものと考えられる。

事例Cの場合、入学直後の授業欠席というささいな失敗体験をきっかけにしてつまづきが始まる。欠席に対する仲間からの予期される非難を恐れて回避的となり余計欠席を重ねることになる。そこでは、対人場面で自我が脅やかされると容易に退却してしまう人格傾向や男性性の弱さが大きく作用している。そして、不本意な学科への移行、製図での挫折が加わって一層無気力となる。さ

らに、卒業研究に着手できない事態に至り、彼は自信と意欲を失って完全に退却した状態に陥る。本例の無気力化の根底には、母親からの自立をめぐる解決し難い葛藤、男性的同一性形成の障害、対人関係での傷つき易さと回避傾向などの問題が存在すると考えられる。

事例Dも事例Cと同様に根本的問題は自我の自立性の乏しさ、男性性・社会性の形成不全、それらに基づく対人関係での適応困難などにあるが、無気力化はつぎのようなプロセスで生じている。本例では予想外に早く下宿で友達ができ安堵した頃から意欲が湧かなくなる。外見的には事が順調に運び始めたことがきっかけとなっているが、内的には目標喪失体験が生じておりそのことが契機として重要であった。対人関係に困難を感じていた彼は、高校の頃から、猛勉強して学者タイプの間人となって自信を得られれば対人関係の問題を克服できるのではないかと考えるようになる。そして、努力、克己をモットーにし秘かに将来の自分の成功を思い勉学のみ傾斜して頑張ってきたが、大学入学後友達ができたことによってその方向づけに揺らぎが生じる。実際、彼は面接過程でその辺りの内的体験について語っている。このような目標喪失を契機として心的エネルギーの退行が生じ意欲減退が始まったと考えられる。

事例Eでは、学部移行後の仲間づき合いのできなさや設計演習でのつまづきによって無気力化している。Eは抑制が強く自主性に乏しい未熟な自我を形成し強迫的で柔軟性の乏しい状態にあった。対人的関わり力、社会性が育まれておらず、自ら他者に働きかけて関係をつくり出していくことに困難があった。彼の自我はそうした問題性を有していたが、多人数で受身に講義を聴く形が多い教養部時代までは問題が顕在化せず経過していた。ところが、志望通りの学科に進んだものの大学以前や教養部時代には仲間との交流をもたないことで棚上げにされていた対人関係のうまくいかなさに当面せざるを得なくなる。また、設計演習という自主性、独創性を要求される事態で困惑し停滞する。こうした適応の失敗を契機に退行し無気力状態に陥ったと考えられる。

3. 家族関係にみられる特徴

家族関係は上述のような自我発達の障害やつまづきに関係する重要な要因である。ここでは面接で得た家族関係の情報やTATから窺える本人の父母像、親子関係のイメージを基に各事例の家族力動の特徴について検討する。

事例Aの家族関係の特徴は支配的な父親を中心とする家族力動にある。父親自身は女性的、依存的な性格でその支配のあり方には支配的依存、しがみつき
の性質を含んでいる。子供に対して高圧的に支配しようとする一方過保護、甘
やかしという面もあり錯綜した関わりをする。息子への干渉支配の背後には強
い学歴志向が作用している。母親は女性的な柔らかさに欠ける人であり、父親
の養育態度に同調的である。そして、父親が母親と母性を競合するような形で
子供に関わるので極めて母性性の強い家庭状況が生まれている。しかも、それ
は家族の一体感を強く要求しそこからの離脱を許さない家族的ウロボロスとでも
表現できるような状況であり、子供の自主性、自立性の発達を阻む性質をも
っている。

そうした家族力動の中で、Aは健全な自我の発達をとげることができなかった
のである。彼は父親に強い恐れを抱いているが、内心秘かに反発、嫌悪を感じ蔑
視している。彼は幼児期に父親から叱られた際馬小屋で「馬に喰わせるぞ」と脅
された恐怖経験をしているが、これは父に逆らうことへの根深い恐れを生み出した
と思われる。父親に逆らうことに強い恐れを抱く彼は表面的に父親に服従し争わ
ないという行動様式を繰り返してきた。競争事態や戦うことからおいてしまう彼
の性向はそうした経験に由来するところが多いのであろう。

彼は父親からの自立をめぐる解決しがたい葛藤をもち続け、成熟した男性的
同一性を形成することができなかった。むしろ、父親がもつ女性的依存的な面を
無意識的に取り入れている感じもある。また、彼の強迫的性格、優劣への過敏
さは学業成績などについて厳しく要求してくる親との関係を背景として、親に
対する防衛（攻撃者への同一化など）として形成されてきたものと考えられる。

事例B、Cの親子関係には父親との関わりが薄く支配的な母親への囚れが強

いという共通点がある。ただし、両者の母親像にはニュアンスの違いがあり、事例Bは不安定で支配的な母親、事例Cでは強く支配的な母親である。

Bは母親との接触が少なく、十分な甘え体験をもつことなく幼児期を送っている。父親の養育態度は放任的で息子への関わりが薄かった。したがって、養育の面では母親の意向が支配的となっていたが、その母親は彼をヒステリックに叱ることが多かった。彼の精神内界では母親像が大きな位置を占め父親像はその影に隠れ存在感のないものになっていたと思われる。

母親との関係において基本的な安全感を培っておらず、父親からの支えも十分に得られなかった彼は、自信に乏しく自我の自立性を育むことができなかった。不安定で支配的な母親への自己主張や反抗は、母親を混乱させ心配させる悪い子になることでもあり、それには母親の愛を失う不安、恐れ、罪悪感などが強く伴ったものと思われる。こうして、彼は母親から出立して成熟の道歩むことができず無力感に囚われることになった。また、父親との関わりが薄く母親コンプレックスに捕らえられているため能動的、攻撃的な面を育めず、成熟した男性的同一性の形成にもつまずいたものと考えられる。

事例Cの場合には、父母との関係のあり方と共に母、兄との三者関係が彼の人格形成に重要な影響を及ぼしている。母親は常に兄をたて、兄弟喧嘩の際にもCの言い分を受け容れず叱ることが多かった。そうした経験から、彼は自己主張、感情表現が相手からの攻撃や拒否を招くのではないかという根深い恐れを抱くようになったと考えられる。また、彼の内界で攻撃性の体験が自己の傷つきへの恐れと結びついた可能性もある。彼は多重な意味において内なる攻撃性を恐れるようになる。こうして高圧的支配的な関わり方をする母親との間で依存欲求、攻撃性をめぐる葛藤を解決し得ず、母親から自立できないでいる。

母親に依存できず愛情飢餓を抱き続けていたが、子供との関わりの乏しい父親は彼を支える役割を果たせなかった。彼は家族の中で心の頼りにする対象を得られなかったが、それは強い自己不全感や自信のなさを生み出し対人関係で自我が脅威にさらされると容易に傷つき退避してしまう人格形成に影響したものと考えられる。さらに、接触が薄く、極めて男性性の乏しい父親との関係と

前述の攻撃性をめぐる葛藤とが相俟って、攻撃性を陶冶し効果的な男性的同一性を形成することができなかつたのである。

なお、以上の事例B、Cに関して興味深いことは、5事例中この2つの事例だけが、父子関係が投影され易いTAT 図版7で〈悪企み〉のテーマを示している点である。これは、否定的母親コンプレックスに捕らえられているB、Cにとって父親と接近することには不安や罪悪感が伴うことを示唆しているように思われる。

事例Dでは母親との密着した関係と父親との心理的距離の遠さに特徴がある。父親はおとなしく自己主張の少ない人で、子供のことは母親まかせて関わりが薄い。Dも父親に対して怖く近寄り難いイメージを持ち、深層には敵意をも秘めている。怖い父親イメージは幼児から繰り返し目撃してきた母親に暴力をふるう父親の姿に由来するが、父との交流が少ないためこのイメージは容易に修正されなかつたと思われる。

母親は末子で長男であるDに幼時から過保護に関わりDも母親に密着依存してきた。母親の息子への密着には夫婦間にある不充足感が何がしか関係している可能性もある。そして、上述のような父親のあり方も関係して母・息子一体の濃密な関係を残したまま青年期に至っている。

こうしてエディパルな心理から脱却できなかつたDは自立性、社会性に乏しい未熟な自我を形成することになる。また、父親が男性性の乏しい存在であり息子への関わりが薄く、Dも父親に恐れを抱いていたところから、父親への同一化を欠き男らしさを育むことができなかつた。父親が母親に対して示す〈悪〉とつながる自らの内なる攻撃性を恐れそれを陶冶することができなかつた面もあろう。同胞が女性ばかりで女性優位の家族構成も彼の男性性形成の弱さを助長した可能性がある。

事例Eの親子関係の特徴は父親、母親いずれとの間でも関わりが薄いことである。見方を変えると、父親イメージあるいは母親イメージへの強い囚れが認められない訳で、これは前記4例と異なる点である。

父親は温和で男性的な面に欠け家庭内では影が薄い。生真面目で強迫的な性

格の持主でもある。Eが抱く父親イメージは不安、恐れ、嫌悪などを伴うものではないが、打ちとけた感情交流をもつ対象でもない。母親も内気で感情表現の少ない人である。Eの母親イメージも支配的とか過保護といった色合いをもたないが、親密な対象というものでもない。

家族間に感情抑制的な雰囲気支配的であり、父・母・子相互間の情緒的な関わりは少ない。おそらく彼は幼児期から父母に十分甘えたり共感的な交流や親密なぶつかり合いをしたりする機会に恵まれなかったのであろう。これは自我の対象への関わり力や情緒性を育む上で重要な要因の欠如である。

こうした家族関係の中で、彼は豊かな情緒性や対象への関わり力を育むことができず、また過度に抑制的な傾向を取り入れ、内界のみずみずしい部分との疎通性を欠く、硬くて自主性に乏しい未熟な自我を形成することになったと思われる。

以上をまとめると、事例Eを除く4例では母性優位で父性の乏しい家族状況を生み出すような家族力動が働いているといえる。しかも、事例B、C、Dでは母性の体現者である母親のあり方が過干渉あるいは過保護な傾向を示し、その母性に歪みの強い要因が窺われる。他方、父性を体現する父親は男性性に乏しく、子供との関わりが薄いかあるいはそれと同時に怖い存在と見られている傾向がある。また、事例Aでは、母親と母性を競合するような父親のあり方の故にこれまた母性の強い家族状況が生じている。なお、事例Eも父性の乏しい家族状況という点では他の事例と共通する。

スチューデント・アパシーの家族関係等について取り上げている報告はこれまで極めて少ない。Walters⁸⁾は4例のアパシー学生を記述し、その家族背景として過保護的母親と成功者・戦士などとして強く男性的な父親が多く、父親が権威的に関わるため男らしさに拒否的となり男性的同一性が育たないことを示している。筆者の事例にみられる家族力動はこれと趣を異にし、強く男性的な父親は登場せずむしろ男性性の乏しさ、弱さの方が目につく。つまりWaltersが言うように強い父親のために子供が男らしさを恐れ母親へ回帰、癒着するというよりも、父親の影が薄かったりその上に父親への恐れがあったりする

ために母親への囚われから脱し難く、父親に同一化して男らしさ、社会性を育むことがうまくいかなくなる場合が多いと思われる。この相違が文化的な差を反映しているのか、それとも両者のサンプルでたまたま見られた特徴の差なのかは俄に判断し難い。

山田⁹⁾は「アパシーは究極するところ父性の拒否という問題に帰結する」と総括しているが、筆者も父性の拒否だけでなく父性体験の欠如も含めた父性体験のあり方が重要であると考え。そして、それは単に父親個人の属性によるよりもその家族内に形成される関係、布置によって規定されると思われる。

4. 相談援助の経過について

本稿で取り上げた5事例に対する相談援助は三通りの経過を辿っている。まず、事例A、Cではカウンセラー側の事情で面接継続が不可能となりやむを得ず中断となった。事例Aは中断後精神科医による薬物治療を受け、1年間の休学を挟んだ後復学したが、以前と同じ状態を繰り返し半年で退学。32歳の現在、漸く親も本人の意志に任せて見守る姿勢に変わりつつあるが、彼が社会的に自立するにはまだまだ時間を要すると思われる。事例Cは中断後他に相談関係をもつことを望まずやがて在籍期間満了のため退学。以後現在までの5年間、筆者とは年に1、2度の割合で面談する機会をもっているが、ほとんど職を得ることもなく家庭にいる。最近1年程は、大学時代に志望したが果たせなかった気象学を独習している。

事例Eの場合、初めの5カ月程は週一度の面接を行っていたが、その後は筆者との関わりは間欠的なものとなり、学科教官の懇切な指導援助の下に卒業まで漕ぎつけた。卒業直後1年間だけ臨時職員として働いたが、そこでも強迫的性格のため苦勞している。卒業から6年後の現在、一級建築師を旨ざして浪人中であるが、楽観は許されないと筆者は見ている。

以上の3例についてはやむを得ぬ事情のためではあるが十分な援助をできず、筆者としては申し訳なく残念に思っている。3例の現在の適応状態をみると、根本的問題ははまだ改善されておらず社会的に自立した状態にはない。アパシーの予後について、笠原は30歳を1つの目印にして終止符をうつか軽快の兆

しをみせると述べているが、そう楽観できる事例ばかりではないと思われる。

事例B、Dでは、カウンセリングによって自我の成長が図られアパシー症状等が改善されたところで終結となった。卒業・退学から4年以上経過した現在、彼らは社会人として元気に活躍している。

この2事例では、父親像の回復、変容とそれに支えられての母親からの離脱が治療的展開において重要な位置を占めている。事例Bでは、カウンセリング開始の頃から父親が息子のことに積極的に関わるようになり、父子の交流が少しずつ増えていった。しかし、Bは母親の意向や過去のことにとこだわり続けていた。そこには母親の意に反することへの不安、恐れが窺われた。ある時、父親はそうした息子を真赤になって叱る。それはまさに父、息子双方にとって〈父親体験〉であり父性を回復する経験となったと思われる。この経験を契機に、彼は自らの意志をかため父親のバックアップを得て母親と対決し、新たな進路に踏み出していった。父親はBが母親の呪縛から解放され大人の世界へ参入していく過程で大きな役割を果たしたといえる。

事例Dの場合、カウンセリング開始から約10カ月後に〈内的な父親との和解〉が生じ、それ以後大きな変化が生じている。彼はある回の面接に父親に対する思いを綴ったものを持参する。前夜父親のことをいろいろ考えているうちに泣いてしまったと言い、「父は結構挫折した人間ではないかと思う。父のことを思い出して“あなたは偉い”と思った」と語る。彼の言表から父親像が肯定化しつつあることが窺われたが、その後夢のレベルでも怖いばかりだった父親のイメージが間の抜けた面をもつものに変化していく。その後、母親からの自立をめぐる苦闘を続けるが、やがてこれを克服し自らカウンセリングを終結した。

以上のように、事例B、Dのアパシーからの立ち直り過程においては父親像の回復、変容が重要な意味をもつが、これは前項で検討したアパシー学生における父性の問題の重要性を裏づけるものである。

文 献

- 1) American Psychiatric Association: Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-III (1980) (高橋三郎・他訳: DSM-III——精神障害の分類と診断の手引 医学書院 東京 1982)
- 2) 石井完一郎・笠原嘉編: スチューデント・アパシー 現代のエスプリ 第168号 至文堂 東京 (1981)
- 3) 笠原嘉: アパシー・シンドローム 岩波書店 東京 (1984)
- 4) 丸井文男: 大学生のノイローゼ——意欲減退症候群 教育と医学 15巻5号 (1967)
- 5) 丸井文男: 留年学生に対する対策 厚生補導 22 (1968)
- 6) 土川隆史: スチューデント・アパシー再考——スチューデント・アパシーの分類の検討——第20回学生相談研究会議香川シンポジウム報告書 21-24 (1987)
- 7) 岡庭武: Student Apathy のまとめ (その1) 第5回大学精神衛生研究会報告書 53-60 (1984)
- 8) Walters, P. A. Jr: Student Apathy (in Blaine, G. B. & McArthur, C. C. (eds): Emotional Problems of Student.) (New York: Appleton-Century-Crofts 1975) (石井完一郎・他監訳: 学生的情绪問題 東京 文光堂 1975)
- 9) 山田和夫: アパシーと父性 季刊精神療法 第10巻第2号 45-50 (1984)
- 10) 山田和夫: スチューデント・アパシーの基本症状についての研究 第7回大学精神衛生研究会報告書 53-60 (1986)